

<福島第一原子力発電所プラント状況等のお知らせ>

(日報：平成 25 年 9 月 25 日 午後 3 時現在)

平成 25 年 9 月 25 日
東京電力株式会社
福島第一原子力発電所

福島第一原子力発電所は全号機（1～6号機）停止しています。

1号機（廃止）

- 平成 23 年 3 月 12 日午後 3 時 36 分頃、直下型の大きな揺れが発生し、1号機付近で大きな音があり白煙が発生しました。水素爆発を起こした可能性が考えられます。
- 平成 23 年 12 月 10 日午前 10 時 11 分、給水系配管からの注水に加え、炉心スプレイ系注水配管から原子炉への注水を開始しました。
現在の注水量は給水系配管から約 2.5m^3 /時、炉心スプレイ系注水配管から約 1.9m^3 /時です。
- 平成 23 年 4 月 7 日午前 1 時 31 分、原子炉格納容器内へ窒素ガスの注入を開始しました。
- 平成 23 年 8 月 10 日午前 11 時 22 分、使用済燃料プール冷却浄化系の代替冷却装置によるプール水の循環冷却を開始しました。
- 平成 23 年 11 月 30 日午後 4 時 4 分、原子炉压力容器へ窒素封入操作を開始しました。
- 平成 23 年 12 月 19 日午後 6 時、原子炉格納容器ガス管理システムの本格運用を開始しました。
- 平成 25 年 7 月 9 日午前 10 時 25 分、サブプレッションチェンバにおける残留水素の排出、およびサブプレッションチェンバ内の水の放射線分解による影響を確認するため、窒素ガス封入を開始しました。

2号機（廃止）

- 平成 23 年 3 月 15 日午前 6 時頃に圧力抑制室付近で異音が発生、同室の圧力が低下しました。
- 平成 23 年 9 月 14 日午後 2 時 59 分、給水系配管からの注水に加え、炉心スプレイ系注水配管から原子炉への注水を開始しました。
現在の注水量は給水系配管から約 1.8m^3 /時、炉心スプレイ系注水配管から約 3.4m^3 /時です。
- 平成 23 年 5 月 31 日午後 5 時 21 分、使用済燃料プール冷却浄化系の代替冷却装置によるプール水の循環冷却を開始しました。
- 平成 23 年 6 月 28 日午後 8 時 6 分、原子炉格納容器内へ窒素ガスの注入を開始しました。
- 平成 23 年 10 月 28 日午後 6 時、原子炉格納容器ガス管理システムの本格運用を開始しました。
- 平成 23 年 12 月 1 日午前 10 時 46 分、原子炉压力容器へ窒素封入操作を開始しました。
- 平成 25 年 4 月 1 日午前 0 時、原子炉建屋排気設備の調整運転において異常が見られないことから、本格運用に移行しました。

3号機（廃止）

- 平成 23 年 3 月 14 日午前 11 時 1 分頃、1号機同様大きな音とともに白煙が発生したことから、水素爆発を起こした可能性が考えられます。
- 平成 23 年 9 月 1 日午後 2 時 58 分、給水系配管からの注水に加え、炉心スプレイ系注水配管から原子炉への注水を開始しました。
現在の注水量は給水系配管から約 1.8m^3 /時、炉心スプレイ系注水配管から約 3.4m^3 /時です。
- 平成 23 年 6 月 30 日午後 7 時 47 分、使用済燃料プール冷却浄化系の代替冷却装置によるプール水の循環冷却を開始しました。
使用済燃料プール代替冷却系について、同冷却系の瞬時電圧低下対策工事に伴い平成 25 年 9 月 24 日午前 6 時 36 分に停止しました。冷却停止時のプール水温は 23.5°C でした。
- 平成 23 年 7 月 14 日午後 8 時 1 分、原子炉格納容器内へ窒素ガスの注入を開始しました。
- 平成 23 年 11 月 30 日午後 4 時 26 分、原子炉压力容器へ窒素封入操作を開始しました。
- 平成 24 年 3 月 14 日午後 7 時、原子炉格納容器ガス管理システムの本格運用を開始しました。

平成 25 年 9 月 25 日、原子炉格納容器ガス管理システムのチャコールフィルタ・粒子状フィルタのサンプリングを実施しました。

- 平成 25 年 9 月 25 日、原子炉建屋上部において、ダストサンプリングを実施しました。

4号機（廃止）

- 平成 23 年 3 月 15 日午前 6 時頃、大きな音が発生し、原子炉建屋 5 階屋根付近に損傷を確認しました。
- 平成 23 年 7 月 31 日午後 0 時 44 分、使用済燃料プール冷却浄化系の代替冷却装置によるプール水の循環冷却を開始しました。

5号機（定期検査で停止中）

- 安全上の問題がない原子炉水位を確保しています。
- 平成 23 年 3 月 19 日午前 5 時、残留熱除去系ポンプを起動し、使用済燃料プールの冷却を開始しました。
- 平成 23 年 7 月 15 日午後 2 時 45 分、残留熱除去海水系ポンプ(B系)による残留熱除去系(B系)の運転を開始しました。
- 平成 24 年 5 月 29 日午前 10 時 33 分、これまで機器ハッチを開口することにより行っていた原子炉格納容器内の排気について、原子炉格納容器内より直接行うため、震災以降停止していた原子炉格納容器排気ファンを起動しました。その後、影響は確認されなかったことから平成 24 年 6 月 1 日午前 10 時 30 分、連続運転を開始しました。
- 平成 24 年 8 月 29 日午後 1 時、補機冷却海水系ポンプ（A）の復旧作業が完了し、本格運用を開始しました。これにより 3 台の補機冷却海水系ポンプが復旧しました。
- 残留熱除去海水系ポンプ（A）および（C）の復旧作業が完了し、平成 24 年 8 月 30 日午前 11 時 33 分、残留熱除去系（A）を起動しました。運転状態に異常がないことから、残留熱除去系（A）の本格運用を開始しました。これにより、本設の残留熱除去系はA系とB系の両系統が復旧しました。

6号機（定期検査で停止中）

- 安全上の問題がない原子炉水位を確保しています。
- 平成 23 年 3 月 19 日午後 10 時 14 分、残留熱除去系ポンプを起動し、使用済燃料プールの冷却を開始しました。
- 平成 23 年 9 月 15 日午後 2 時 33 分、原子炉は残留熱除去系、使用済燃料プールは補機冷却系および燃料プール冷却系、各々の系統による冷却を開始しました。
- 平成 24 年 5 月 15 日午後 2 時 20 分、これまで機器ハッチを開口することにより行っていた原子炉格納容器内の排気について、原子炉格納容器内より直接行うため、震災以降停止していた原子炉格納容器排気ファンを起動しました。その後、影響は確認されなかったことから平成 24 年 5 月 18 日午後 2 時 12 分、連続運転を開始しました。

その他

- 平成 23 年 6 月 17 日午後 8 時、水処理設備において滞留水の処理を開始しました。また、7 月 2 日午後 6 時、水処理設備による処理水を、バッファタンクを經由して原子炉へ注水する循環注水冷却を開始しました。その後、平成 25 年 7 月 5 日、原子炉注水系信頼性向上対策として、復水貯蔵タンク炉注水系による 1～3 号機原子炉注水の運用を開始しました。
- 平成 23 年 8 月 19 日午後 7 時 41 分、セシウム吸着装置から除染装置へのラインと第二セシウム吸着装置の処理ラインの並列運転による滞留水の処理を開始しました。
- 平成 23 年 10 月 7 日午後 2 時 6 分、伐採木の自然発火防止や粉塵の飛散防止を目的とした構内散水を、5、6 号機滞留水浄化後の水を利用し、開始しました。
- 地下水による海洋汚染拡大防止を目的として、平成 23 年 10 月 28 日、1～4 号機の既設護岸の前面に海側遮水壁の設置に関する工事に着手しました。
- 所内共通ディーゼル発電機（B）については、これまで復旧作業を進めてきましたが、平成 24

年 12 月 26 日午前 0 時、所内共通ディーゼル発電機（A）に加えて、保安規定第 131 条に定める異常時の措置の活動を行うために必要な所内共通ディーゼル発電機として運用開始しました。

- 平成 25 年 7 月 1 日、地下貯水槽の汚染水は全て移送を終了していますが、拡散防止対策およびサンプリングは継続して実施中です。

＜拡散防止対策＞

地下貯水槽漏えい検知孔水（No. 1 北東側、No. 2 北東側、No. 3 南西側）の全ベータ放射能濃度の低下が緩やかであることから、地下貯水槽 No. 1～3 にろ過水または淡水化装置（RO）処理水（全ベータ放射能濃度：約 $1 \times 10^3 \text{Bq/cm}^3$ ）を移送し希釈する処置を適宜実施しました。

【最新の希釈実績】

- 地下貯水槽 No. 1（6 月 19 日～）：8 月 3 日、約 60m^3 のろ過水を注水。
- 地下貯水槽 No. 2（6 月 27 日～）：8 月 1 日、約 60m^3 のろ過水を注水。
- 地下貯水槽 No. 3（7 月 24 日～）：8 月 12 日、約 107m^3 の当該地下貯水槽ドレン孔水（北東側）を注水。

9 月 24 日、地下貯水槽 No. 1～3 の漏えい検知孔内に漏えいした水を仮設地上タンクへ、地下貯水槽 No. 1, 2 のドレン孔内に漏えいした水を当該地下貯水槽内へ移送する処置を実施しました。

＜サンプリング実績＞

9 月 24 日、地下貯水槽 No. 1～7 のドレン孔水（14 箇所）、地下貯水槽 No. 1～4, 6 の漏えい検知孔水（10 箇所のうち 2 箇所は試料採取不可）、地下貯水槽観測孔（22 箇所）、地下水バイパス調査孔 a～c（3 箇所のうち 1 箇所は試料採取不可）、地下水バイパス揚水井 No. 1～4、海側観測孔（1）～（4）についてサンプリングを実施しました。分析結果については、前回（地下水バイパス調査孔 a～c（3 箇所のうち 1 箇所は試料採取不可）、地下水バイパス揚水井 No. 1～4、海側観測孔（1）～（4）：9 月 17 日採取、その他：9 月 23 日採取）実施したサンプリングの分析結果と比較して大きな変動は確認されませんでした。

また、9 月 16 日から 9 月 17 日にかけて採取した地下水バイパス調査孔 a～c（3 箇所のうち 1 箇所は試料採取不可）、地下水バイパス揚水井 No. 1～4 および海側観測孔（1）～（8）の水についてトリチウムの分析を実施した結果、前回（海側観測孔（5）～（8）：9 月 9 日採取、その他：9 月 10 日採取）の分析結果と比較して大きな変動は確認されませんでした。地下貯水槽 No. 3 漏えい検知孔（南西側）の全ベータ値については、地下貯水槽の浮き上がり対策工事の再開に伴い、再び上昇傾向に転じており、当該地下貯水槽の浮き上がりを防止するための対策工事が今月末まで継続されることから、当該検知孔の濃度変動は今後も確認されるものと考えております。

- 1～4 号機タービン建屋東側に観測孔を設置し地下水を採取、分析しており、平成 25 年 6 月 19 日、1, 2 号機間の観測孔において、トリチウムおよびストロンチウムが高い値で検出されたことを公表し、監視を強化するとともに、1, 2 号機タービン建屋東側に設置したウエルポイントおよび集水ピット（南）から地下水をくみ上げ中です。

＜最新の地下水移送実績＞

8 月 31 日午後 3 時 50 分、ウエルポイントおよび集水ピット（南）から 2 号機立坑 C への移送を停止し、同日午後 3 時 55 分、2 号機タービン建屋への移送を開始しました。

9 月 3 日から日中時間帯に 2 号機立坑 B 水（トレンチ閉塞により集められた水）を 2 号機タービン建屋へ移送するため、ウエルポイントおよび集水ピット（南）地下水の移送先の切り替えを順次実施していましたが、トレンチ閉塞作業がほぼ終了し、9 月 7 日からウエルポイントおよび集水ピット（南）地下水を 2 号機タービン建屋へ移送中です。

- 平成 25 年 8 月 19 日、発電所構内 H 4 エリアのタンク堰内および堰のドレン弁の外側に水溜まりがあることを確認しました。H 4 エリア内の I グループ No. 5 タンク近傍の底部で水の広がりがあることから、当該タンクの水位を確認した結果、現時点で約 3 m 水位が低下（水量：約 300m^3 ）していることを確認しました。堰内の水は一部回収を実施していますが、ドレン弁を通して堰外へ出ていると思われることから周辺の土壌の回収を行うとともに広がり範囲について引き続き調査を実施します。その後、H 4 エリアタンクの東側にある排水路の壁面において筋状の流れの痕跡があり、当該部の表面線量当量率が最大 6mSv/時 （ $\beta + \gamma$ 線（ $70\mu\text{m}$ 線量当量率））であることを確認しました。このことから、汚染した土砂等が排水路に流れた可能性があるとし、今後、詳細な調査および評価を行います。

8月22日、H4エリアIグループNo.5タンク内の水および仮設タンクに回収していた水（堰内に溜まっていた水）をH4エリア内のBグループNo.10タンクへ移送を完了しました。

8月22日、漏えいしたタンクと同様のフランジ型の他エリアのタンクについて総点検（外観点検、線量測定）を実施しました。タンクおよびドレン弁の外観点検において、漏えいおよび水溜まりは確認されませんでした。H3エリアのタンク周辺において、部分的に線量が高い箇所（2箇所）を確認しました。当該箇所は乾燥しており、堰内および堰外への流出は確認されませんでした。また、当該タンクの水位は受け入れ時と変化がないことを確認しました。

また、5、6号機の滞留水の保管等に使用しているフランジタイプタンクの健全性確認（外観目視確認、水位確認）を8月26日までに実施し、異常が無いことを確認しました。

漏えいが発生したH4エリア内のH4エリアIグループNo.5タンクについて確認を行っていたところ、当該タンク含む3基（H4エリアIグループNo.5タンク、H4エリアIグループNo.10タンク、H4エリアIIグループNo.3タンク）が当初H1エリアに設置されていたこと、H1エリアで当該タンクが設置された基礎で、地盤沈下が起こったため、H2エリアに設置する計画でしたが、実際には、H4エリアに設置されていることが判明しました。No.5タンクからの水漏れと、H1エリアの基礎が地盤沈下した際に設置していた経過があることの因果関係は不明ですが、漏えいリスクの低減対策として、タンク内の水の移送を実施しました。

<最新の移送実績>

- ・8月25日午後3時57分より、H4エリアIグループNo.10タンクからH4エリアBグループNo.10タンクへの移送を開始しました。8月27日午前2時7分、移送を完了しました。
- ・8月29日午前10時30分より、H4エリアIIグループNo.3タンクからH4エリアBグループNo.10タンクへの移送を開始しました。9月2日午前11時3分、降雨対策のため移送を停止しました。

8月31日のパトロールにおいて、4箇所の高線量当量率箇所（ $\beta + \gamma$ 線（ $70 \mu\text{m}$ 線量当量率））を確認しましたが、関連する全てのタンクの水位に低下は見られず、排水弁も閉としているため、堰外への漏えいはないと評価しました。

このうち、H5エリアIVグループNo.5タンクとH5エリアIVグループNo.6タンクの連結配管部の上部にある配管の保温材を押したところ、滴下が確認されたことから、滴下した床面を測定したところ、約 230mSv/時 であることを確認しました。当該の連結配管からの滴下は継続しておりませんが、当該配管下部の床面に大きさ約 $20\text{cm} \times 20\text{cm}$ の変色箇所（乾いた状態）があり、その後、当該部の保温材を外して確認したところ、各タンクと連結配管を接続している隔離弁（2弁）のうち、No.5タンク側の隔離弁と連結配管を繋いでいるフランジ部より約90秒に1滴の滴下があることを確認したことから、同日、当該フランジ部に吸着マットを巻き付け、ビニール養生を施すとともに、当該フランジ部の床面にドレン受けを設置しました。なお、当該連結配管の隔離弁（2弁）については、No.5側およびNo.6側のどちらも閉められていたことを確認しております。9月1日、当該部のフランジボルト12本の増し締めを実施し、漏えいがないことを確認しました。念のためH5エリアIVグループNo.5タンク、H5エリアIVグループNo.6のタンクの水位レベルの測定を実施し変動のないことを確認しました。

<最新のパトロール結果>

9月24日のパトロールにおいて、高線量当量率箇所（ $\beta + \gamma$ 線（ $70 \mu\text{m}$ 線量当量率））は確認されませんでした。また、堰内床部近傍は、堰内に溜まった雨水（深さ $1 \sim 12\text{cm}$ 程度）による遮へいにより、引き続き線量当量率が低い状態となっています。さらに、目視点検によりタンク全数に漏えい等がないこと（漏えいの確認ができない堰内溜まり水内を除く）、サーモグラフィーによる水位確認（9月23日撮影分の分析結果）により水位に異常がないことを確認しました。

8月22日のH4エリア以外のタンク総点検（外観点検、線量測定）において確認された、部分的に線量が高いタンク（H3エリアBグループNo.4タンク、H3エリアAグループNo.10タンク）について、これらのタンクの外部に水の滴下等は確認されていませんが、念のため、8月29日から9月18日まで、タンク内の水をR0廃液供給タンクへ移送を実施しました。また、H3エリアAグループNo.10タンクの残水については、H3エリアBグループNo.5タンクへ移送が終了しております。

今回のタンクからの漏えいを踏まえ、福島第一南放水口付近（T-2）、H4エリア付近B-C排水路合流地点（C-1）、C排水路合流点前（B-3）、B排水路ふれあい交差点近傍（B-0-1）、C排水路正門近傍（C-0）、C排水路35m盤出口（C-2）で水を採取し、セシウム134、セシウム137、全ベータの核種分析を実施しました（9月24日採取）。分析結果について

ては、前日（9月23日採取）と比較して大きな変動は確認されませんでした。

H4エリアタンク周辺に設置した観測孔で採取した水について、全ベータ、トリチウムの分析を実施しました。

今回、新たに分析したH4エリア周辺観測孔（E-5）の9月24日採取分の全ベータの分析結果については100Bq/Lであることを確認しました。H4エリア周辺観測孔（E-1, E-2, E-3, E-4）の9月23日採取分のトリチウムの分析結果については、9月22日採取の分析結果と比較して大きな変動はありませんでした。

また、H4エリア周辺観測孔（E-1, E-2, E-3, E-4）の9月24日採取分の全ベータの分析結果については、9月23日採取の分析結果と比較して大きな変動はありませんでした。

- 平成25年8月27日午後5時、4号機原子炉ウエル、原子炉压力容器、使用済燃料プール内のガレキ撤去および炉内機器の移動作業を開始しました。
- 平成25年9月24日午前10時22分、3号機タービン建屋地下から集中廃棄物処理施設（雑固体廃棄物減容処理建屋 [高温焼却炉建屋]）へ溜まり水の移送を開始しました。
- 1～4号機建屋に隣接している井戸（サブドレンピット）の浄化試験をした結果、ピット内の溜まり水から放射性物質が検出されており、その流入経路としてフォールアウトの可能性があるので、新たに1～4号機建屋周辺に観測井を設置し、フォールアウトの影響について確認することとしています。
- 平成25年9月24日午前9時56分、2号機タービン建屋地下から3号機タービン建屋地下へ溜まり水の移送を開始しました。
- 平成25年9月5日午前8時40分頃、3号機原子炉建屋上部の瓦礫撤去作業に使用している600トンクローラクレーンのジブ部（クレーンの腕部分）が伏せた状態となっており、主マストとの接合部材が損傷していることを当社社員が確認しました。けが人はなく、他設備の損傷についても確認されておりません。また3号機プラントパラメータ等に異常は確認されておりません。

その後、当該クレーンをより安全な状態とするため、9月5日午後8時20分から午後11時55分にかけて、他のクレーンにより当該クレーンの吊フック部を吊り上げて当該クレーンを旋回させ、伏せた状態にあったジブ先端部および吊フック部を3号機廃棄物処理建屋西側の地面に着座させました。

9月10日、当該クレーンの点検を行うため、ジブ部および主マストを地上に伏せる作業を実施しました。

原因調査の結果、クレーンの先端ジブマストを起状するワイヤーケーブルを巻き取るウインチのドラムロック（油圧で操作）の油圧ホースの継手部分（ねじ式継手）が緩み、当該ドラムロックが解除された状態になった結果、当該ワイヤーケーブルに緩みが生じ、先端ジブマストが徐々に傾倒したため、主マストへ想定外の荷重がかかり、主マスト上部の付根に亀裂が生じたものと推定しました。再発防止対策として、当該クレーンの当該ねじ式継手の新品への取替え、当該ならびにもう1台の600トンクローラクレーン操作当日の作業開始前・作業終了後において、ねじ式継手に緩みがないこと、および当該ドラムにロックがかかっていることを確認します。また、当該ドラムにロックがかかっていることを、遠隔で確認できるよう表示灯の設置を実施しました。

- 平成25年9月12日午後3時20分頃、5・6号機滞留水処理装置（車載型）から水が漏れいしていることを、当社社員が発見しました。このため、ただちに滞留水処理装置を停止し、漏えいが停止したことを確認しました。漏えいが確認された範囲について詳細に確認を行ったところ、滞留水処理装置を設置しているトレーラ内に約2m×約6mの範囲で漏えいした跡があり、トレーラ内からトレーラ外へ漏えいした水が溜まっていた範囲については、約3m×約3m×約1mmでした。漏えいした水の量については、漏えい時間、流量等から算定し、約0.065m³と評価しました。なお、周辺に排水溝等はないことから、海への放出はありません。また、漏えいした水を採取、分析した結果、構内散水に使用している水*と同程度の値でした。

<漏えい水サンプリング結果>

セシウム134：検出限界値未満【検出限界値： 1.6×10^{-3} [Bq/cm³】

セシウム137： 4.2×10^{-3} [Bq/cm³]

全ベータ：検出限界値未満【検出限界値： 1.4×10^{-2} [Bq/cm³】

* 散水可能な放射能濃度：セシウム134とセシウム137の合計が 1×10^{-2} [Bq/cm³] を満足すること
原因調査の結果、RO装置から構内散水用水貯留タンクへ送水するための弁の1つが「閉」状態だったため、RO装置出口配管の圧力が上昇し、安全弁が動作しました。安全弁排水が排出先の洗浄水槽に流れましたが、洗浄水槽では受けきれずに溢水しました。構内散水用水貯留タ

ンクへ送水するための弁の1つが「閉」状態だった要因は、当該弁近傍での作業において、意図せずに当該弁のハンドルに接触し、当該弁を閉めた可能性があるものと推定しました。また当該弁は常時開状態であったことから、RO処理装置から構内散水用水貯留タンクへ送水する際に、当該弁は開状態にあるものと思い込み、当該弁の状態については、確認していませんでした。再発防止対策として、当該弁のハンドルを取り外し、容易に操作できないようにするとともに、当該弁に注意表示を取り付ける、安全弁の排出先を洗浄水槽からRO装置の取水槽に変更することで、洗浄水槽からの溢水を回避（取水槽にすることで、排水された水は、RO装置内を循環する）、RO装置の操作手順書に通常操作しない弁についても、RO装置の系統構成時に弁の「開確認」または「閉確認」を実施するよう見直しを行います。

- 9月25日午前9時20分頃、協力企業作業員がFエリアタンク（6号機北側）*のパトロールを実施していたところ、H1タンクとH2タンクの連絡管の保温材に、にじみがあることを発見しました。また、保温材下に設置してある敷き鉄板に滴下した跡を確認しました。その後、当該連絡管（ポリエチレン管）の保温材を外して確認したところ、漏えいではないことを確認しました。このことから、当該のにじみは雨水もしくは結露水であると判断しました。

* 5, 6号機建屋滞留水を保管しているタンク

- 9月25日午前11時17分頃、5号機原子炉建屋4階北西側階段の上部にある空調ダクトから水が垂れていることを、当社社員が発見しました。その後、現場状況を調査したところ、当該空調ダクト上部にある同空調のドレン配管に付着した結露水であることを確認しました。

以上